

支援でも、援助でもなく：「まなびあい」という 関わり

文・写真
増田和也

共同研究 ● NGO 活動の現場に関する人類学的研究
—グローバル支援の時代における新たな関係性への視座 (2011-2014)

近年、携帯電話やインターネットといった通信機器や電子メディアが世界の隅々にまで普及するなか、人やモノ、情報が地域や国境をやすやすと越えてゆく動きは、ますます加速化している。そうしたなかで地域や国家を越えた人と人の関わり方も変化し、これまで以上に多様なアクターが関わりあい、複雑で多層的な関係性が生みだされている。本共同研究では、国際支援という関わり方に焦点を当て、こうした展開について議論を重ねている。

一般的に、支援や援助とは二者以上の主体の間で「ある者」が「ない者」に施しを与えることである。それは多くの場合、経済的に豊かな側がそうでない側に対し、金銭やそれに代わる財や物資、あるいは知識や技術を与えることとなる。必ずしもすべての支援活動に当てはまるわけではないだろうが、そこでは「与える／与えられる」「教える／教えられる」という関係が生じ、その関係性は一方通行で非対称なものになりがちである。技術や知識を一定の期間内で効率的に伝えることが重視されれば、そうした関係性に陥りがちとなるのは仕方のないことなのかもしれない。とはいえ、それは支援される側が支援者に依存する関係を生みだすことにもなりかねない。

一方で、支援する側は相手を支援するだけでなく、支援される側から何かを受け取ることはないのだろうか。そして、互いに何かを与え／受け取りあうことで、双方向の関係をつくることはできないだろうか。さらに双方の間で共通の目的や目標が見つければ、両者が共感とともに手を取りあうことができるのではないか。そのような関心からはじまったのが、ある NGO による「まなびあい」という試みである。ここでは、この試みを取り上げながら、多様化する国際支援活動の一例を紹介したい。

「まなびあい」という試み：いりあい交流

ここで紹介するのは、「いりあいネット（いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク）」による「いりあい交流」という取り組みであり、筆者もメンバーのひとりとして関わっている。「いりあいネット」は、国内外の村落社会を対象として国際協力活動に関わってきた実践家や研究者が中心となり、日本やアジアなどで住民主体の地域づくりに取り組む人びとをつなぐことを目的に、2004年に立ち上がった団体である。名称に含まれる「いりあい（入会）」とは日本の村落に息づいてきた地域資源の共同管理のあり方であり、「よりあい（寄合）」とは地域における合意形成の仕組みである。そして、同じ関心をもつ者たちが、地域や立場を越えて、それぞれに直面している状況や課題の共通性・同時代性に気づきながら、その改善や解決に向けて知恵を出しあいたいという思いから、「まなびあい」という言葉を添えた。（島上 2007: 32-33）

ところで、インドネシアでも日本の入会に似た地域ごとの資源利用・管理のかたちがあったが、これらは近代的な土地制度が整備される過程で解体され、住民が地域資源を利用し



入会林野の現場で地元の方から話をうかがう（2006年、福島県郡山市石筵）。

ようとする際に問題が生じるようになっていた。こうした流れは日本でもインドネシアでも同様である。2003年、インドネシアの中スラウェシを拠点にする弁護士へのヘダール・ラウジュンが国際シンポジウムのために来日した。その際、ヘダールは日本の山村を廻り、入会の存在を知り驚くとともに、インドネシアでの土地問題の解決に通じるヒントがあると直感した。そして、そのときヘダールの通訳を担当していた島上宗子が、これをきっかけに思いついたのが「いりあい交流」である。

まず2005年に日本の村びと・NGO関係者・研究者が中スラウェシの山村を訪問し、翌年には中スラウェシの同様の人びとに役人を加えたメンバーが日本の山村を廻った（いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク2007）。このときは入会をめぐる制度が主なテーマであったが、入会をより深くとらえていく上で、法制度だけではなく、実際に人びとの暮らしがどのように入会と関わっているのか、たとえば、森の利用に関する知識や技術、儀礼や慣習などの言語化されない側面にも目を向けることが重要であることに気がついた。

そこで、2008年からは中スラウェシの州都であるパルの若者たちとともに、先の交流で関わった山村のひとつであるトンプ集落を訪ね、村びとと森との関わりを映像やイラストで記録する取り組みを始めた（Laudjeng, Latjupa and Shimagami 2012）。先の活動が両国の入会に関わる人びとの間の「まなびあい」であるとすれば、今度はインドネシアの街に暮らす若者と村びとの「まなびあい」である。そこには日本人の映像カメラマンやイラストレーターも関わるようになり、何度もトンプへと足を運ぶようになった。

見えにくい成果、終わりのない関わり

「いりあい交流」をつうじて、それに関わった者たちはそれぞれに何を得たのであろうか。まず確実にいえることは、集落では私たちとの関わりをつうじてインフラ設備が整ったわ

けではないということだ。私たちがこの集落と関わりだしてから建設されたのが、中学校と車が走れるように整備された山道である。しかし、どちらも地方政府によるものであり、我々が支援したものとえば、小さな自家用発電機と集落内で離れて暮らす数戸のために水源地から延ばした水道ホースだけだ。あるとき、別の集落に暮らす若者が、この集落に日本人が何度もやって来ているという話を聞いて、私に向かって尋ねた。「日本人がここに来て、何を支援しているのだ。その証拠のモノは何だ」。そのとき私は活動の成果を具体的なモノとして示すことができなかった。

また、映像記録に関わるパルのメンバーは彼の友人からこう言われたという。「日本のプロジェクトに関わったのなら、さぞかしお金が手に入っただろう」。支援を受ける機会が多いインドネシアでは、国際プロジェクトはこのようなイメージをもたらすのであろう。しかし、「いりあい交流」に関わったパルの若者たちには原則として人件費は渡していない。つまり、彼らも興味があるからこの活動に関わっているというかたちだ。さらに別のメンバーは、2年間以上も集落に通いながら記録作業を続けていることを彼の友人から驚かれたという。多くの国際プロジェクトでも対象地域の状況を把握するために集落調査をおこなうが、それは初期段階に比較的短期間で終えるものである。ひたすら記録作業を重ねるといって、「いりあい交流」は他のプロジェクトとは異なる。

それでは、集落の人びとはどうであろうか。映像記録の取り組みでは仮編集した映像を集落内で上映し、村びとからの反応や意見を伺うとともに、記録の過程で浮かんだ疑問や不明な点を質問した。村びとたちはすぐさま説明してくれることもあったが、ときには村びと同士で話しあったり、考え込んだりすることもあった。かつては当然であったことが、現在では必ずしもそうでないことに気がつき、その背景や理由を考えている様子だった。パルの若者も、村びとと同じ方言を日常で話しながら知らない言葉が少なくないこと、方言で説明される概念を標準語で表現することが何とも困難であることを痛感したという。そして、私もふくめて気がついたのは、自分たちの視点がいかに近代教育や啓蒙主義的な枠組みにとらわれているのかということだった。

このように、「いりあい交流」では彼らの暮らしにすぐさま役立つような物資や設備をもたらしたわけではない。それでも、あるとき長老の妻がぼつりつぶやいた。「政府は子どものための学校をもってくる。モトコ（島上のこと）たちは

大人のための学校をもってくる」。村びとたちは一連の関わりをつうじて、たんに外部からの新しいことを知るだけでなく、自らのことをあらためて考え直すきっかけとなり、このように言ったのかもしれない。

私たちが集落を離れる際、長老が毎回のように口にする言葉がある。「また来なさい。この関係を途切れさせないように」。ヘダールも「この純粋な関係がこれからも続くように」と、「いりあい交流」を振り返りながら言う。彼らがこのような言葉を何の銜いもなく口にしてくれるのは、私たちの関わりが物資や金銭といった直接的な利益や利便と関わりが少なかったからかもしれない。

これまでのところ、「いりあい交流」は日本側からの企画と資金が進められてきた。また、ここ数年間の取り組みは日本人やパルに暮らす

若者が山村の人びとからまなぶことが中心となり、村びとからみれば、必ずしも双方向のまなびあいになっているとはいえないかもしれない。その点で、「いりあい交流」はまだ模索段階にある。模索を重ねながら、この取り組みに関わる者それぞれが、関心の尽きぬがぎり相手方を訪ねる。そして、私たちのやっていることは、

相手にとって、また私自身にとって、どのような意味のあることなのだろうか。そう問いかげながら、次はどのようなことができるのだろうかを考える。それは終わりのない関わりである。それが「まなびあい」という試みなのかもしれない。

【参考文献】

- いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク 2007『経験をつなぐ：日本とインドネシア「いりあい交流」2年間の記録 2004.11-2006.10』いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク。
島上宗子 2007『「いりあい交流」がつなぐ日本とインドネシア——山村の知恵と経験に学ぶ』加藤剛編『国境を越えた村おこし』pp. 31-61 NTT出版。
Hedar Laudjeng, Syahrul Latjupa and Motoko Shimagami 2012. *Dunia Orang Tompu*. Yogyakarta: INSIST Press.

ますだ かずや

高知大学 SUIJI(Six-University Initiative Japan-Indonesia) 推進室特任助教。専門は環境人類学、東南アジア研究。自然利用、開発、村落形成をテーマに、インドネシア・スマトラの農村社会を対象とした研究を行っている。一般社団法人「いりあいネット（いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク）」理事。著書に『インドネシア 森の暮らしと開発——土地をめぐるくつながり>とくせめぎあい>の社会史』（明石書店 2012年）など。



焼畑で播種の儀礼と作業を撮影する（2009年、インドネシア、中スラウェシ州シギ・ピロマル県トンプ）。